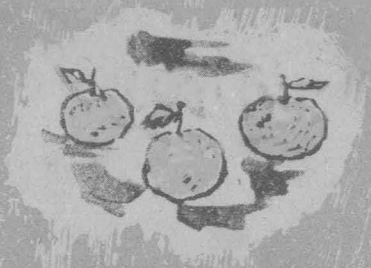
三國志

卷の十

三國志

十の巻

吉川英治著



講談社版

三國志卷の十

昭和二十三年四月十日　印刷
昭和二十三年四月十五日　發行

定價　七十圓

著者　吉川英治

東京都文京區晉羽町三丁目十九番地
發行者　尾張眞之介

東京都文京區久堅町百八番地
印刷者　大橋芳雄

東京都文京區久堅町百八番地
印刷所　共同印刷株式會社

東京都文京區晉羽町三丁目十九番地
發行所　株式會社　大日本雄辯會講談社
振替口座　電話（一三一番）
東京三九三〇　九段（33）代表一八六番

共同製本

不　賣

目次

三立の卷

日輪……三
上・中・下……一八
酒中別人……二七
魏延と黄忠……三五

短髪壯士……五〇
落鳳坡……五九
破軍星……七一
草を刈る……八〇
金雁橋……八六
西涼ふたゝび燃ゆ……一〇七
馬超と張飛……一一八
成都陷落……一四一

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

臨江亭會談……一五七
冬葉啾々……一七三
漢中併呑……一八四
劍と戟と楯……二〇〇
遼來々……二〇七
鵞毛の兵……二二四
休戰……二三三
和議……二三〇

柑子と牡丹……二三四
藤花の冠……二四二
神卜……二五〇
正月十五夜……二六一
御林の火……二七三
陣前公用の美酒……二八三

裝幀　恩地孝四郎
挿繪　矢野知道人

三立の巻

三國分立古圖

高句麗
丸都
遼水
幽州
濊貊
韓
辰
馬韓
匈奴
武威
涼州
并州
常山
冀州
平陽
魏
司州
兗州
青州
臨淄
徐州
彭城
豫州
許昌
洛陽
雍州
長安
五丈原
武都
氐
羌
山都
南陽
安南
揚州
揚州
寒
西陵
巴東
秦陵
白帝城
永安
建平
荊州
公安
陵郡
江陵
赤壁
江夏
沙羨
湘
流
水
蜀
成都
益州
西巴
吳
安建
雲南
桂陽
蒼梧
南海
廣州
交州
趾安

日輪

一

呉侯の妹、玄徳の夫人は、やがて呉の都へ歸つた。

孫權はすぐ妹に質した。

『周善はどうしたか』

『途中、江の上で、張飛や趙雲に阻められ、斬殺されました』

『なぜ、そなたは、阿斗を抱いて來なかつたのだ』

『その阿斗も、奪り上げられてしまつたのです……それよりは、母君の御病氣はどうなんです。すぐ母君へ會はせて下さい』

『會ふがよい、母公の後宮へ行つて』

『ではまだ……御容體は』

『至極、お達者だ』

『えつ。お達者ですつて』

『女は女同士で語れ』

いぶかる妹を、膠もなく後宮へ追ひ立て、孫權はすぐ政閣へ歩を移して、群臣に宣言した。

『予の妹は、玄德の留守に、その家臣共から追はれ、今日、吳へ立歸つた。かくなる上は、吳と荊州とは、事實上、何らの緣故もないことになつた。卽時、大軍を起して、荊州を收め、多年の懸案を一擧に解決してしまはうと思ふ。それに就て、衆あらば申立てよ』

すると、議事の半ばに、江北の諜報がとゞいて、

『曹操四十萬の大軍を催し、赤壁の仇を報ぜんと、刻々、南下して參る由』

と、あつた。

俄然、軍議は緊張を呈した。

ところへ又、內務吏から、

『重臣の張紘、先頃から病中にありましたが、今朝、息をひきとるにあたり、遺言の一書を、わが君へと、認めて終つて果てました』

『なに、張紘が死んだ』

折も折である。吳の建業以來の功臣。孫權は涙しながらその遺書を見た。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

張紘の遺書には縷々として、生涯の君恩の大を謝してあつた。そして、自分は日頃から、呉の都府は、もつと中央に地の利を占めなければならぬと考へ、諸州に亙つて地理を按じてゐたが、秣陵（南京附近）の山川こそ實にそれに適してゐる。萬世の業礎を固められようとするなら、ぜひ遷都を實現されるやうに。これこそいま終りに臨んでなす最後の御恩報じの一言であると結んであつた。

『忠義なものである。この忠良な臣の遺言を何で反古にしてよいものではない』

孫權は、一方には、刻々迫る戰機を見ながら、一面直に、その居府を、建業（江蘇省・南京）へ遷した。

かくてその地には、白頭城が築かれ、舊府の市民もみな移つて來た。

また、呂蒙の意見を容れて、濡須（安徽省・巢湖と長江の中間）の水流の口から一帶にかけて、堤を築いた。これに使役される人夫は日々數萬人、呉の國力の旺なることは、かうした土木建築にも遺憾なくあらはれた。

もちろんこれは、やがて來るべきものに對する國防の一端である。來るべきもの、それは曹操の南下だ。

曹操はそれよりもずつと早くから宿望の南征と呉への報復に專ら軍備の擴充を計つてゐた。

すでに四十萬の大編成は、

『いつでも』

と、いふ態勢を整へたので、いよ〳〵許都を發しようとすると、長史董昭が諂つて彼にかうすすめた。

『およそ古來から、臣として、丞相のやうな大功をあげられた御方は、是を歴史に見ても、求めることはできません。周公も呂望も、比較にはならないでせう。亂世に立つて、群盜亂臣を平げ、風に櫛けづり雨に浴し給ふなど、三十餘年、萬民のために、また漢朝のために、身をくだかれて來たことは、ひとしく天人倶に知るところです。今はよろしく、魏公の位に登つて、九錫を加へ、その威容功德を、天下に見せ示すべきでありませう。』

二

どんな英傑でも、年齡と境遇の推移と共に、人間のもつ平凡な弱點へひとしく落ちてしまふのは是非ないものとみえる。

むかし青年時代、まだ宮門の一警手にすぎなかつた頃の曹操は、胸いつぱいの志は燃えてゐても、地位は低く、身は貧しく、稀〻、同輩の者が、上官に媚びたり甘言につとめて、立身を計る

のを見ると、

（何たるさもしい男だらう）

と、その心事を愍み、また部下の甘言をうけて、人の媚びを喜ぶ上官には猶更、侮蔑を感じ、その愚をわらひ、その弊に唾棄したものであつた。

實に、曾つての曹操は、さういふ颯爽たる氣慨をもつた青年だつた。

ところが、近來の彼はどうだらう。赤壁の役の前、觀月の船上でも、うた〻自己の老齢をかぞへてゐたが、老來まつたく青春時代の逆境に嘯いた姿はなく、ともすれば、耳に甘い近側のことばにうごく傾向がある。

彼もいつか、むかしは侮蔑し、唾棄し、また其愚を笑つた上官の地位になつてゐた。しかも今の彼たるや人臣の榮爵を極め、その最高にある身だけに、その巧言令色にたいする歡びも受け容れかたも、到底、宮門警手の一上官などの比ではない。

いま重臣董昭から、

（この際、魏公の位に登つて、九錫を加へられては如何ですか）

と、すゝめられると、曹操は何を憚る考へもなくすぐに、

（さうだ、なぜ自分は、今まで九錫を持たなかつたらう）

と、すぐその氣になつて、朝廷にそのゆるしを求めた。もちろんその意の儘になる。彼は以後、魏公と稱し、出るも入るも、九錫の儀仗に護られる身となつた。

九錫の禮といふのは、

一　車馬　大輅、戎輅。大輅ハ金車、戎輅ハ兵車ノ事。黃馬八匹。

二　衣服　王者ノ服。袞冕赤舄。朱ノ履タル事。

三　樂縣　軒縣ノ樂、堂下ノ樂。昇降必ズ樂ヲ奏ス。

四　朱戸　門戸ハ紅門ヲ以テ彩ル。

五　納陛　朝陛ヲ登ル自由。

六　虎賁　常時門ヲ衛ル軍三百人、虎賁軍トイフ。

七　鈇鉞　鈇鉞各〻一、鈇ハスナハチ金斧、銀斧ナリ。

八　弓矢　彤弓一、彤矢百、玈弓十、玈矢一千、朱弓、黑弓ナリ。

九　秬鬯　祭祀ヲ行フタメノ酒

これをみた荀彧はかなしんだ。以前の曹操とは次第に變つて來るのを冷靜に彼のそばで眺めてゐたのは、彼よりは年下のこの荀彧といふ忠良な一忠臣だつた。

『丞相。すこしあなたも、お年をお召になり過ぎはしませんか』

『なぜだ』

『愚に返つたところがお見うけされます』

『予が九錫の禮を持つたことを云ふのか』

勃然と、曹操は、色をうごかした。荀彧は、靜かに、

『さうです。功いよ〳〵高きほど、御自身は、退謙をお示しあるべきです。然らずんば、折角、三十餘年、旗に漢室への忠誠をかざし、口に萬民のためと稱しながら、結局、あなた御自身の慾望に過ぎなかつたといふことになりませう。弱冠、生死の迷妄を捨て、百戰苦鬪、今日を築いて來ながら、その精神と節操を、門の飾りや往來の見得などと取替へるなどは、實につまらぬ人生の落ではありませんか』

涙をふくんで諫めると、曹操はぷいと席を去つて、

『おい〳〵、董昭をよべ』

と、近侍へいひつけながら、大步して去つてしまつた。

以來、荀彧は、病と稱して、自邸にひき籠つてしまつた。建安十七年冬十月、いよ〳〵南下の大軍は都を出ることになつたが、彼はなほ、曹操から呼びに來ても、

『このたびは御供できません』

と、參加を辭した。

つひに、使者が來た。

『魏公からのお見舞である』

と、使者は、食物の入つてゐる一器を彼の前に贈つた。

見ると、器の上には、『曹操親ラ之ヲ封ス』といふ紙が懸けてある。あとで開いてみると、器の中には何も入つてゐなかつた。

『お氣持は解つた……。噫』

荀彧は、その夜、自ら毒を服んで死んだ。

三

すでに南征の大軍は、水陸から續々と呉へ下つてゐた。

途中、曹操へ、都から知らせがあつた。

『荀彧が毒を服みました』

『……自害したか』

曹操は喩をとぢた。ほろ苦い眉をひそめて。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.